

「やらされ探究」から「マイ探究」へ!

生徒が主体的に取り組む学習であるはずの探究学習に「やらされ感」を抱く生徒、教師は少なくない。探究学習を生徒、教師が自分事化し、よりよいものとするためにはどうすればよいか、事例を通じて考える。

Turning Point

探究学習の
目標を明確化し、
高校生活と接続

日常生活のあらゆる場面で
自ら考え、行動することを求めて、
探究学習の充実を図る
兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校

生徒の 転換点

- 入学直後から対話や計画、振り返りの経験を積む
- 1年次2学期以降は、高校生活の様々な場面で生徒に自律を促す

探究学習の素地づくりとして フラットな対話を経験させる

兵庫県・私立芦屋学園中学校・高校ではこれまで、「総合的な探究の時間」はクラス担任の裁量で実施されてきた。2024年度に普通科アドバンスコース1年生のクラス担任を務めた間柴史先生は、学校として体系立てた探究学習を確立することを念頭に、自身のクラスでの実践を開始した。まず間柴先生が行ったのは、探究学習の意義を生徒に伝えることだった。

「教師から指示されないと行動できない生徒にはなつてほしくない。学習はもちろん身の回りのことも含め、日常生活のすべてにおいて自分で考えて行動できるようになることが、探究

学習に取り組む目的だと話しました」

探究学習の素地づくりとして1学期に重視したのがグループ対話だった。生徒間の人間関係がまだできていない入学直後から様々な機会を使って、他者と対話する経験を積ませた。

「入学直後で互いのことをまだ知らないからこそ、遠慮や気負いのないフラットな対話ができると考え、英単語の暗記法といった学習方法なども、グループ対話を通して共有させました。自分たちの力で『答え』にたどり着く経験をさせたかったのです」(間柴先生)

さらに間柴先生は、生徒に家庭学習の計画とその振り返りに頻繁に取り組ませ、よりよい家庭学習のあり方についても話し合わせた。

2学期以降は、自分たちで考え、行動するこ

学校概要

設立 1936 (昭和11) 年
形態 全日制／普通科・国際文化科／共学
生徒数 1学年約260人
2024年度卒業生進路実績 国公立大は、兵庫県立大に1人が合格。私立大は、早稲田大、京都外国語大、京都産業大、同志社女子大、同志社大、立命館大、龍谷大、追手門学院大、関西外国語大、関西大、近畿大、関西学院大、甲南大、神戸学院大などに延べ153人が合格。短大・専門学校進学40人。就職6人。



教諭
嶋田利希 しまだ・らいき
同校に赴任して2年目。生徒会担当。
国語科。



総務部主任
吉本英寛 よしもと・ひでちか
同校に赴任して10年目。数学科。



教頭補佐
間柴史 ましば・つかさ
同校に赴任して2年目。普通科アドバンスコース主任。国語科。

生徒に対する教師の働きかけ

目標

自分たちで考え、
行動する力を身につける

1 年次 1 学期

- 学校生活の様々な場面でグループ対話に取り組み、他者との対話を通して新たな価値を創造することができることを体感する
- 計画の立案や取り組みの振り返りを頻繁に行い、主体的に物事を進める方法を学ぶ

変化

1 年次 2 学期以降

- 探究学習では、「他者のために」という課題の設定の方針を指示し、具体的な活動は生徒に委ねる
- HRの進行や小テストの計画など、教師が行ってきた活動の一部を生徒に任せる

指導の変化に対する 生徒の声 現2年生・金子千寿さん

1年生の2学期に、先生が突然、終礼や講習などについて「今後どうするかは君たちで決めなさい」と言いました。それらがなくなると困ることになると思い、友人と一緒に先生に相談しに行き、終礼は私たち生徒が行い、講習の時間割も生徒が考え、先生に提案しました。探究学習も、生徒だけで考えて進めました。最初は「人口減少」「戦争」などの大きいテーマを課題に設定していましたが、グループで話し合う中で、高校生が困っていることを課題に設定しようということになり、最終的には「紙の教科書は重くて持ち運びにくいのに、なぜデジタル教科書は普及しないのか」という課題を設定しました。

※学校資料を基に編集部で作成。

とを生徒に強く求めた。終礼の進行、学習計画表の作成、放課後に行う外部検定試験対策講座など、教師が行ってきた活動の一部について、間柴先生は「君たちが必要だと言わない限り私はやらないし、必要だと思ふのなら、君たち自身でやってもらっていいよ」と伝えた。生徒たちは戸惑いながらも、自分たちで終礼を行い、講習の時間割を作成し、教師に提案した。

探究学習を通して、自分たちで 考え、行動する力を獲得

探究学習では、「他者のために」という課題の設定の方針と、12月末に成果発表をすることだけを伝え、課題の設定から仮説の検証の方法まで、すべてを生徒に考えさせた。

「生徒は1学期に行った家庭学習の計画とその振り返りの経験を基に、12月末までの探究学習の計画を自分たちで考えました。また、環境問題や国際紛争といった大きな課題を設定していたグループは、グループ対話を通して身近な課題に設定し直していました」（間柴先生）

とは言え、課題が決まらないグループ、情報収集が停滞するグループもあった。

「正直、成果発表までに活動のまとめが間に合わなくてもよいと思っていました。教師に言われなくても動く経験を大事にしたかったからです。実は成果発表の後、ある生徒が『次はこんな課題を設定して探究学習に取り組みたい』

と私に申し出てきました。その生徒は、活動のまとめが発表までに間に合わなかったグループにいたのですが、満足できる成果が得られなくても次の目標を掲げる彼女の姿を見て、2学期の取り組みは生徒の成長につながったのだと、自信が持てました」（間柴先生）

1年次2学期までの探究学習によって、生徒は教師の指示を待たずに行動するようになった。その成長は2年次の現在も継続していると、1年生担任の吉本英寛先生は語る。

「現2年生は、自学自習の時間の長さや学習内容の質の高さが、これまでの2年生と明らかに違います。自分がするべきことを自ら始められているのは、探究学習の成果だと思います」

25年7月には、普通科アドバンスコース1・2年生の生徒が、大学教員や他校の生徒を招く探究発表会を企画した。プログラム立案や当日までの準備、発表会の進行などに主体的に取り組んだ2年生は、これから探究学習に取り組む1年生のモデルになっていると、1年生担任の嶋田利希先生は語る。

「2年生が、審査員をどのように会場に誘導するのかなどを話し合う中で、『初めて学校に来る人向けの校内案内動画が必要では?』といった、社会に開かれた学校づくりのアイデアがいくつも出てきました」

自分たちの行動を変えることで、学校の学びはもっと充実する。そのことに探究学習に取り組む生徒たちは気づき始めている。

●同校では、2025年12月22日（月）及び26年3月14日（土）に探究コンテスト「grow up meeting」を開催します。12月の回では大学教員などの審査員からアドバイスを受たり、高校生同士で意見交換をしたりすることで、各自が取り組む探究学習をブラッシュアップします。3月の回は最終発表の場です。参加を希望する高校は、同校の間柴教頭補佐までお問い合わせください。